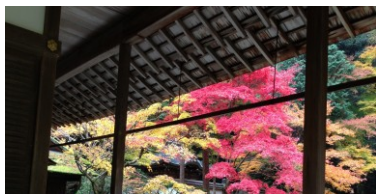


美しき秋、アート。
文藝も又、美ぞ世にありや

なる

しふやりふかふ

美しき哉、アート。文藝し又、美ぞ眞實也。
なる



あづま路の東のはてよりなを奥つ北方、道奥の奥羽の州に生ひいでたりし瘦さし
ぢ ひむがし きたかた

身なれども、いま東京都に住みある身なるを、幽かに霞みし朝まだき、半ばに開く
あづまきやうと

る瞼のうち、双眸の眞央なる、燠の水底たまゆらに、玄くあはれに髣髴す、蒼く
まなふた ふたまなこ まなか おき みなそこ くら

鬱^{くも}たる昏^{より}き杜岡^{をか}、藁^{わら}葺^きく屋根の侘^わし納屋、奇^きしき磐^{いわ}膚^だ白^はき山、嶮^けしき峽^{たに}間に岩^{ばし}迸^はる

水、羊齒^{じゆ}の繁茂^{はんばう}に苔^む生^{いは}す巖^{いは}、古^{ふる}巖^{いわ}榿^{いつ}に翳^{かげ}されし風のさやけき貴^お人^くの古墳^{きふみ}。

ふるさとの景色を追ふもあへなし、夢にしあれば。

ふつとおのが身に返り、羽のふとんを跳^うねのけつ、髪^{かみ}乱^{みだ}れつつも上^う身^みを起^おこし、柔^{やは}し褥^{しとね}に沈^{しず}みあつ、胡坐^{こざ}せし。掛^か布^ふや、シートのシルクなる、なめらかにて鮮^{あざ}やかなる

艶^{えん}、触^ふればすべる心地よき、囁^{ささ}くやう、衣^い擦^されの、音^{おと}もよき。

「ふああ、あああ。すわああつてえとおー。起きなくつちやあくあああ……んー……
出^でたくなあい」

甘睡^{うまい}（甘^{かん}眠^{みん}、熟^{じゆく}寝^ね、味^み寝^ね）の余韻^{よゐん}、未^まだ朦^{もう}朧^{ろう}の靄^{あい}を纏^{まと}ひ、夢^{ゆめ}と現^{げん}世^{しよ}の多重^{たうじゆ}露^ろ出^{しゆ}の
さなかに在^ありてあまりに心地よろしく、え離^はれらえず。

さもありなむ。水鳥の羽毛、鳥の胸より撰るといふ、いとかるき、よきあたたかみに富み、くはしくは羽根毛といふべきものにて、稀なる逸品、ハンガリー

(Magyarország マジヤルオルサーグ) 産なる鶩鳥 *goose* のみにて満つといふ上もじやう。正倉院宝物文なる文様の、淡きシルク生地のカバーにくるみ、かるらなる、あたたかきあじはひ、人をして耽らしむなり。

あまの いさなこ

にじうさん

天之韋眞子、女、廿三歳、午前5時。奢りたるマンシヨンに住まゐし、ベッドに目覺め、長く黒き髪ゆらしすべり出で、羊毛深きスリッパに足先差し込みぬ。

さわり

その優しき感触に陶然たるも、想ひは、欧州羊毛交易史を逝くまゝに駆け廻り、古き欧羅巴の風物、たとへばボッティチエッリ Sandro Botticelli の『春 Primavera』の背景に画かれたりし装飾的な森や、ガリアの地なる長き髪の荒き武者ガリア・

コマータ Gallia Comata、ウェールズの地にあるならかなる緑色の丘、コッツウォルズ Cotswolds の村などを、いざなはゆるまゝ、夢の翼広げ、馳せらしむ。

コッツウォルズの村、イングランドの中央部^{みなか}なる丘陵地帯に、「蜂蜜色なる石」「ライムストーン」とかやいふ石灰岩コッツウォルズストーンを用ひて積み建てむ、その味はひ、古ものかたり想ひ起こさしむるものなり。しばし陶酔恍惚す。

夢遙かなる哉。我にかへりて、

「さ、急がなくっちゃ」

されば一足歩む。

古きレミントン Remington Rand 1927-1955 なるタイプライターの傍らを過ぎぬ。文つくり^に用ひはせねども、小説、映画に出づること頻りなるアイテムにしあれば

夢想翔けらしませむとて敢へて持て囃し飾りたる。

などか想ひ起こせるはペリー・メイスン Perry Mason なり。しかれども作者アー
ル・スタンリー・ガードナー Erle Stanley Gardner は口述筆記によりて文を著はせ
しこと遍く知らゆれば、かく想起すゆゑを知らず。心かくも微妙なり。

ときにジョルジュ・シムノン Georges Simenon を想起せし。タイプライターへ向
かへば、汗にシャツ濡れける。アーネスト・ヘミングウェイ Ernest Miller

Hemingway 想ひ泛ぶも不可思議なり。彼愛用せるはコロナ CORONA 3 (left shift)
なると世に知らゆれば。

二足歩む。壁面華やぎけるが眸に入りぬ。

眺む。

金箔はがれ缺けたる古き額縁に収まりぬその油絵、パリ Paris の骨董屋にて買ひ求

ふるものや

めたる氣に入りの、煤けしもあがひ難き風雅の趣あるなり。『聖アントニオスの誘惑』
聖なる大アントニオス Αντώνιος 二五一年頃・三五六年、エジプト生まれ、修道院の
始祖、苦ぎやう者。

窓より街の早朝（夙めて）を眺む。冬宵未だ昏し。薨いならぶ静謐なり。遠くにあ

つめて

そら

くら

りければ高層のビルディングは霞みて、車音時折かすか、自転車こぐ音ゆくり、さ
さめく囁りさやか、御社のいと小さくもいみじく深き杜。見ゆればやすし。

もり

「さあさあ、こんなことしてる場合じゃないわ……」

とかや言ひつも、腕の時計を見遣れば、自ずと頬に微笑泛ぶなり。

宝飾眩きカルティエ・タンク・フランセーズ、竜頭にサファイア燦めき、忌みじ

きものなる哉。

大いなる満ち足りを覚え、周囲見廻し、まなこ眼転ずれば、昨晚読み耽りたる本ありて、ふみ小さき円き卓に開き乱れつも、シャンパーニュのグラス倦み疲れたる憂いの面持ちにて添ひ、偃月刀のかたちなる銀製しおり、頁はざまに挟み攔きてしあり。物影ゆがみ映る。

角背の上製本、手にすればやはらかき革なり。紙は手揉和紙にて古拙感ある色使ひ、またよし。特注せし品なればかくもありき。

『失はれし時を求めて *À la recherche du temps perdu*』といふはすなはちマルセル・プルースト Valentin-Louis-Georges-Eugène-Marcel Proust 1987-1922 著せば、言はずも世に知らゆる書なり。

たくかたはら

卓^{たく}傍^{かたはら}なるアームズチエアに坐す。眠気まとふ瞼ぬぐひて気怠くブルーレイ・レコーダーのリモートコントローラーをぞ手にする。指は打つ。苛立ちあり。

昨晚放映されし映画、録画されたるやを確かめつ、スマートフォンを手に取りて着信確認す。履歴なし。メール受信確認す。さまざま着信あれども、友やら迷惑メールやら利用料金請求のお知らせやらメールマガジンなり。焦燥覺ゆ。PCのスリープ醒ましむ。メール・ソフトのアイコンをぞクリックする。なし。ポータルサイト立ち上げぬ。無料メールを開く。されどもなかりき。

虚し。さぞな徒^{いたずら}ならずや。

昨日の問ひへの答へ未だ得られじ。彼の男の言葉なかりき。まゝにて遂に得られざるや。待つ道を選^えみしこと、後悔するなり。あれなとき、刹那言ひければ、かや

うな悔ひなし。いと口惜し。

言ひたきを何ゆゑかのときに言はざりしや。唇を噛むも虚し。あだなり。重ね自らへ問ふ。機を失せば、そは意味を失ひ、言の葉の生命を喪ひける。さればなにゆゑあのと看問はざりしや。何ゆゑ。何ゆゑにや。あゝ、何ゆゑに。既に遅し。想ふも儚し。

韋眞子、触るる指先を止めし。

「追いつがれば喪われてしまうのがわかっているから？ いゝえ、そうじゃないわよ。あゝ、莫迦莫迦しい」

ありまほしきメールのなき侘しさを殴り棄てつ、脳髓より情を剥がして心喪ひ、考へを引き裂きて思ふをせず。……刹那の黙考。想ふ莫れ。いや、思ひを捨てよ。

眠るがごとく、かつての露西亜の兵が雪中に、機を待ちてひたすら力を耗さずゐるかのやうに。されども堂々廻りとは言はずや。……いや、さに非ず。無爲なるものは。人無為と知りても果敢すべきものにありせば。さりとても……否。かくは言へども……否や、否……あゝ、否とは言へども何かは。

止まり立ちてよきものかは。いざ歩めやも。歩む。

豪奢なるシルクの絨毯、ムストフ模様のカシャーシ織敷かれたるを踏みしめぬ。

シルクのパジャマにて懶惰。なを。パジャマといふ言葉、インド、パンジャブ地方の民の衣に由来せり。女韋眞子、薔薇色の薔薇文様に包まれ艶やかなる生地、静かに輝く。晩に洗ひしローブを出だす。

洗濯は日々の習ひにて帰宅するや欠かさず爲せるなり。清ら爽やかさぞ眞の精髓た

しょうぎ

る正義、と伝う眞神地方の伝統かくにこそしあればかくあらめ。澄み明けくあるこそ尊しと伝へ統べられし地の民們。天之家古く眞神の地に住まう氏族にしありて眞子女逝^いにしへの眞神の族の精神をぞかく深く受け継ぐなり。

やから こころ

洗面盤の台のまへに立てり。鏡に映るおのが姿に見ゆ。

まみ

凜々たる火のごとし。白く耀くもまた、蒼く冷たき氷のごとくにて、あたかも昇り立つ炎。^{かぎつひ}冽たる眩き玉なり。されども眼を伏せぬ。

多くを忘れむとするがごとく、眼のまへに燦めきいならべるさまざまなる化粧の品、香りの品、数多をゆくりと眺めむ。壇は黙せり。

臉を上げぬ。

挑むかのやう、鏡に映じしおのがすがたを眺め遣りけり。烈しき焰の眼差し凜々

たる双眸を縁取る暈がアイ・シャドウのやう、長きまつ毛も皐月の華のおしべのやう、あでやかに眼を縁取り飾り、奢美華麗ならざるものかは。過剰ならざるや。又細き鋭き顔立ち、猛禽のごとき眸、唇尖り、気性の猛きを表はす。

廿三の若き女にしあれども、疲弊し、やつれしやう、頬やや削げたりとても皮膚に毛穴見えず、なめらなること、萌え始む芽より柔らかし。生れ初めの、ういういしき瑞々しさ、たへなること、言の葉も絶へ、言説及ばず。

顔洗ひの萼^{うてな}、鍍金の細工を巧みに飾り、きらびやかなるなり。照明具も金華のごとく装ひ、惜しみなく奢られたる大理石、さまざまなる縞目のさまざまなる綾、あたかも帝国ローマのごとく贅尽くし豊穰なり。脱衣の小部屋へ赴く。

パジャマ脱ぎても暖房能く働きて寒き覚えなし。すらりシルク滑るのごとく落つ。

籐の籠に放りて裸身なりぬ。

またも鏡に映えしおのが実像を眺むる。右方の口元をのみ上げ、微笑む。

「そして、わたしは、マラルメのエロディヤードのように、恍惚と自らにのみ、あぐがればいいのかしら。でも、何の解決にもならない。いずれ滅びて土や砂になつてしまうのに……。

美しいものは心を満たし、昂らせ、気持ちを上へ引き上げるけれども、それつて一瞬のことで、すぐにまた地へ突き墮とされてしまうわ。そうよ、やり切れない。

どうすればいいの？ どこにも解決はないわ。……ま、いいか。さあつてと」

バスルーム隣は厠、金につやめく眞鍮ノブ附きたる明るき楓の木の扉あり。

開けば書棚を備へたるなり。かつて文豪、谷崎潤一郎翁が記せしごとく、厠の清

きは心鎮ましめ慰め癒しむるものにしあれば、韋眞子、玩味に能う諸典籍をならべ置くなり。それら書物はよく吟味せるもののみなり。

その坐に坐すれば、住まう街の風情、あまねく見渡せらゆるなり。窓ありて、見ゆればなり。得難きことにしあれば、此處を住處に選みしゆゑんの一つなり。朝昼暮晩四季に眺め、空想尽きることなし。衆諸々なるいとなみの跡、ゆかしからず、また面白からざるものかは。

一切は歴史書のごとし。観照し、奥なる義を味読して哲学を鑑賞すなり。うましこと限り莫し。

又音響機器も奢りて音楽を樂しむるなり。二つのチューナー、眞空管とデジタルを組み合はせるの趣にあり。スイッチす。麗はしき、いにしへの欧州巨匠のクラ

シカル、時には歌舞伎、ボサノバ、能樂、ヒーリング、インド音楽、胡樂、雅樂、アジアの金打樂器、西域の弦樂器、オリエントの旋律、ギリシアの豎琴、または古きジャズなり。出でてシャワー室へ入りぬ。

シャワーの口より熱き湯、ほとばしりて大理石なる湯浴み室、やがて湯氣に満つ。白く霞みて膚より芯へ暖かさ伝はり、総身の毛穴も開きて、一切の細胞、一斉に目醒むるを覺ゆる。熱く血も廻る哉。かつて帝国もかくあらずや。

幻想髣髴す。空想自ずとカラカラ大浴場やら数多古代ローマの公衆浴場をぞ駈け廻る。大理石づくりの巨大なる施設、蒸し風呂の湯氣、レバノン杉のベンチに坐して絶へ間なく語り合ふローマ市民、皇帝の横顔のレリーフある硬貨、元老院の男、
e t c^く眩めきをぞ覺ゆる。

「さてと」

石鹼を右手にす。刻印もクラシカルなるサンタ・マリア・ノヴェッラ Santa Maria Novella のヴェルティナーソープ。フィレンツェより寄せたる愛でたきもの。手ざぎやうにて型抜きし、六十日といふ自然なる乾燥を経て、完成するは植物成分の石鹼。コラーゲンやココナッツオイルなどをゆたかあまたふくみ、洗ひ上がりはいとややくしめやかなるなり。泡立ち天鵝絨なるかのやう、え喩えやうもなかりけり。きめ細かく粘り強く、手にて転がせば、つよく泡立ち、指離すとき角が立てり。フィレンツェの老舗なる最古の薬師^{くすし}どころの調合にしありて、膚の汚れを洗ひ、かつ涵養す。

熱き湯とミストとに包まれたる清潔^{きよら}の快楽^{けらく}、えも言はれじ。熨^{あなうれしゑや}哉。

「あゝ、気持ちいい……」

午前四時半ば。

出でてはベローラ Bellora のバスタオルにてぬぐひ、一拭きのち、バスローブ羽織て、洗面盤の鏡のまへ、陶器にシェービングソープを入れ、G・ロレンツイ G.Lorenzi の穴熊の毛ブラシ用ひて泡立てり。イルチエポ Il Ceppo のシェービングホルダーに替刃を装着、毛ブラシの官能を味はひてその後に、頬に剃刀を当つ。

論ず迄もなく、剃る髭なし。

これも快樂の一つなるなり。男なる自分を空想すなり。あたかもこの女の脳裏には、男装の麗人、ジョルジュ・サンド George Sand 1804. 7. 1 - 1876. 6. 8 なる仏蘭西の女流作家泛ぶらし。

或ひはテロワーニュ・ド・メリクール Théroigne de Méricourt 1762. 8. 13 - 1817.

68 (娼婦出身のフェミニズム運動家・女性革命家。革命に刺激され、パリを中心に政治活動に没頭、乗馬服に幅広帽子といふ男装に身を包みて闊歩し、革命のシンボル「自由のアマゾンヌ」と呼ばはれ、逮捕・釈放ののち絶頂を迎えるも、対立せし党派を支持す女性らによりて馬上より引きずり降ろされ、服引き裂かれて裸にされ、暴行を受く。一説によらば公衆の面前にて尻を丸出しにされ叩かゆるといふ辱め受くとかや。その後、発狂) か、又はフェルニッグ姉妹か、いやはやマネット・ボヌールなどいふをか……

小さき吹き出物ありて血が白き肌に滲む。エモスターティコ石にてさらりと撫でて止血す。ドライヤーにて長く黒き髪乾かし。

化粧室に入りてまたサンタ・マリア・ノヴェツラのハンドクリーム、アーモンドハンド・ペーストもまた良品りやうひんのうちの良品なり。アーモンド油、鶏卵末、蜜蝋みつろうなど往時俾れうばしむ料を惜しみなく使ひ、存分に練られけり。他様々なるクリームの壘を手にし、頬に、脛に、唇に、指に、爪に、それぞれに異なるを塗りき。みめかたちよき爪をパフにて磨き、ブラシにて黒髪梳く。北辰の星の燦々散るかのごときその御櫛（みぐし、髪のこと）を。

化粧水を沁み渉らせ、美容液を指先にて頬や額に伸ばし、皮膚の栄養を与うなり。うへに乳液塗布し、水の気を艶の下に封じ、甦らしむ。パウダーファウンデーションを馴染ませ、アイシャドウやらマスカラやらにて描くやう、かたちをすアイメイク施す。

ハルミユラの女王 السيرة ابن حنبل 的 عروة بن الزبير といふ誇らかに眺む。
満悦すなり。

すなはちおのれの一々を飾りて莊嚴せり。心昂らせ高らしむなり。

獅子狩る猛々しきアツシールの王族のやう、アツカド Akkad のサルゴン Sargon を愛せし女神イナンナのごと、またイシュタルのやう。想へよ、バビロンの青きイシュタル門を。吾はさに劣らじ。見よ。

ネブカドネザルもさやうべかんめるとぞ想ほゆる贅を爲す。野蠻なる強者にして高貴の一族の氣風ぞ。砂漠の軍馬を従へ、青き門より入らば空中（懸空）庭園、壮大なるひろき行列道路を歩み、市の中央なる七層の聖塔（ジグラット）の、天空に聳ゆるを見ゆ。偉容猛々し。おのれを聖と觀ぜざるかは。

午前五時。

「さあ、食事しなくっちゃ」

フレンチ・マラン鶏の茶の斑のある卵を茹でしこと、三分三十秒。濃紺に金の縁取りあるミントン Minton のエッグ・スタンドへ載せるなり。その半熟を銀のスプーンにて掬ひて食す。ミントン & テイファニーなるアンティーク、ロイヤルブルー金彩盛装飾アイボリー・プレートも又あり。

ケトルに湯沸きぬ。ウェッジウッド Wedgwood & Corporation Limited のカップ & ソーサーを。ヨーロッパ最古のドイツ製焙煎機にて直火焙煎せられしジャマイカ・カフェの豆にて淹れ、珈琲をぞ啜りける。

パルミジャーノ・レッジャーノのブロックから削り取り出し、頬張りし。協会の

認定印あるチーズこれ味はひ深し。心は恍惚の天上の原を駈け廻るなりけり。

次、プロシュート・クルード・パルマ。熟成せし芳醇なる香りの旨みある燻製肉。焼印附きたる塊を、薄く切り、ひとくちに頬張る。薄きがゆゑ、蕩けるかのやう触感ありて妙なることすべてを絶し越へて善けむ。

人、侮る莫れ。韋眞子、食を疎かする日なし。喰らふといふは畢竟、生くるの義生の大事なりと知りたればこそかくあらめ。

午前六時。

朝餉終へ、再び化粧室へ赴く。チーク、さうして唇にルージユ、ペンシルを使ひ、あざやかに輪郭せり。リップグロスを施せり。パフュームを選ぶには、諸々躊躇もせり。いかに自らを莊嚴すべきか煩ふも、諸感覺に潜みたる天啓の俚に採みし。

「あゝ、これが眞実という言葉の定義なのよ。美よ。美は神が精神の感覺に与える」
美と善の永遠を望む。さにしあらば、すべての時は黄金の時ならずや。全生は肯定せらゆるに相違なし。善事なりと解すも、証する論なし。世に横溢せる無慈悲なる物象の羅列、物的法則のみぞ在る。ひたすら只管それしかあらざる絶空の、宇宙的なる深淵。

上下左右前後中外の広大宇宙、一切空無にしあらば、自ら決し自己への肯定するは必定公理なり。すべての存在者は肯定へ赴かざるを得じ。空中にしあらば。

なぜ肯定せらゆるを欣求すや。などか枯渇する喉のごとく妄執するや。何とならば肯定せらゆるとは生存の安立を意味すればなり。存在の安定なり。これ生命一個体の安全なり。以て種の存続へ繋がるなり。さすれば種の存続といふは宇宙の構成

要素に缺如なきことを意味するなり。ビッグバン以降、絶へることなき永劫不滅の命題なり。ゆゑんを知らず。さもありなむ。

方便にしあらば。

韋眞子、心中に想ふ、

『わたしたち人間が^よ譴きことへ、^{あき}喜らかなるものへ、^{よろこ}歡びへと向かうのは、天然自

然の摂理で、わたしたちの心のまゝに動かせられるものじゃない。宇宙萬象を主宰する大御神さまの御心なんだわ』

とぞ。

かくて静かに微笑む。贅に飽ひたる豊穰の神の、黄金なる高貴の^{みせう}微笑を。

午前七時。

イヤホンを耳に差し、玄関扉を開け、颯爽と出勤す。長きコートを翻し。ワードローブとせし衣類はサヴィル・ロウ Savile Row にて年々作らせるが常なり。13番地ストアーズ・ビスポーク Stowers Bespoke を吾が気に入りと称す。

海島綿のシャツにネクタイぞ紋織、靴はその日の心の俣に拠りてサントーニ

Santoni やチャーチ Church's を、かはるがはる履く。靴ブラシや布、靴クリームにも凝りこだはり、毎週入念に塗り磨きたるを樂しみとす。タンの色合ひ、潤み深く底よりか柔らに輝けるも又よし。それゆゑ爪伸ばさじ。工匠の技を愛す。工人の手作業こそ大いなる知恵なれ。智慧といふは、棟梁の知恵にぞ源ある。人皆これにしたが遵守ふ善けむ。

この虚しきうつしの無明の激烈なる濁濫流に棹差すはただ睿智なり。

さて、しずか荘重に廊下進みて昇降機のみへ止まりぬ。こまかくほそき細工の縁取る大理石製スイッチを押す。やはらかにゆくりと開く。静謐なりき。しずしずとやはらかに降り行く。

2階にて降りけり。髪結ひに入る。マンション内にぞありける。韋真子のため、いつも早朝より店開くる女主人、毛先整へ、梳り、メイクを仕上ぐる。これが常なり。髪まさぐる指の触感、官能的にもあるか。毛穴狭まり縮み、頭皮粟立つやも。

手早くたくみに終はり、階下へ。

マンションのエントランス、ギリシアより寄せたる天然の白き大理石を不斷に用ひてバロックの聖堂礼拝堂のごとし。イオニア風の円柱もあり。床に艶つややかに玉ひかりたる色大理石、滑らかなり。ペルシャより寄せたる絨毯敷き置きて歩むに深し。二重

の自動ドアを出でれば、空気冷凜にて吐息白し。

アールデコ *art deco* 風デザインなす屋根付きなるバス停に着く。透明板なる風避け壁あり。フレンチ・ブルーの広告大胆にぞ画くあり。ベンチは匠技凝らす寄木細工、イタリアン・アンティークなり。ウォッチを見む。

午前八時なりき。

革靴より文を出だす。皮革装丁なる冊子、『二十四の命題(Die 24 Satze)』一六九

〇(ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ *Gottfried Wilhelm Leibniz*

1646.7.1-1716.11.14) なり。読みぬ。

「なぜ非存在ではなく、存在があるのか」

誰もが「え答へずなり侍りつ」ならむや。問ひの解は *logos* の絶え果てし處にあり

き。是非もなしとぞ知らゆる。在るといふは、畢竟、氣遣ひなり。氣遣ひの熾せる現象なり。

すなはち将来への不安、自らの生存に対すゾルゲ *Sorge*（関心、配慮）、畢竟、意識といふべきものなり。ただ激流に差したる棹。架空なるにしあり。

仮に客観的な實在といふものとせば、思惟考概の枠の外にあるなれば、無味無臭にて無色透明、無音無触にて無意識なるべかんめり。

それ畢竟、なしと言ふべきもの。しかれどもさやう言ふは易くも、思惟のスキムに嵌まらずといふは矛盾なり。その思惟の枠に於ひて思惟の枠の爲す思惟の枠のかたちにしあればこそかくはあらめ。

如何やうすべし。

かやうなる論考に妄執する事、さぞかし世の人、愚痴とぞ思ふべかんめり。韋眞子も知る、愚昧なりとぞ。されど思ひを廻らせ、思惟の高みへ昇るかの心地せし事、思惟の至高へと翔るかの幸福なる感覺は他に類なし。得難し。人が如何に言ふとも、心に懸けるものかは。かくも天昇せし心地に酔ひしとき、蒼穹限りなく碧く映えて美し。天翔せる思惟、その清^{すが}しき快を、世人知らずして我を愚弄すなりとぞ、彼女あさみて笑ふなりける。敢へて驕り高ぶる女神のごとく^{あざと}号を挙ぐるなり。

人、欲し求む想ひ満たさゆるとき、又満たさゆると知りしとき、快き感覺を与うる神経系を報酬系といふなり。欲求といふは、食欲や体温調整欲求のやう生物學的・

刹那的低次のものから、誉めらゆる、もしくは愛さゆるにより満たさゆる、高次に
て長期的なるものまで含有すなり。これぞ人の造りの畢竟なる。

さう想へば、人の称讃、又非難など何かは。所詮人はさやうなる生存の原理に基
づき欲し、行動せむとぞ知りせば。世の眞理は脳内神経伝達物質のもたらす効果に
しかあらず。嘲罵愚弄など、いかでか心に病むものかは。

バス来たる。

エアブレーキ音、阿弗利加の象の鼻の息のごとし。乗りてはまたもや空想に耽る。
これが韋眞子の常なり。ゆくりは車輪を転ず。動く風景。街なり。狭く雑然たるも

人の生くる痕跡眺む面白きかな、そぞろ窓の外見てさまざま空想すなり。古き小さき昭和の風情ありし街にしあれば、箱庭にも似たる、いとをかし。剥がれかけたる古き電柱の貼紙なども眺めつ。郵便ポストや庭木、石垣、魚屋が店先に冷凍庫付き軽自動車を道端に停めむ。盆栽としぼんだ赤提灯、理髪屋の主人は暗い店内にて剃刀を馬革用ひて研ぐ、植木鉢がならぶ、寂びれた電機店、アパートのガスメーター、古い雑居ビルの錆びた非常階段、写真店、人の住まぬらしきトタン屋根の家、風呂の煙突、狭き畑、家屋を潰した跡地に作る駐車場、コンビニエンスストア、八百屋はや店を開けをり、眺むるにさまざま空想泛ぶ、想念は筋斗雲がごとくに時空自在に駆け廻るなり。

着きたる駅舎も古し。セピア色の古写真のやう。改札にてスイカ使ふが未だ不思

議に想へるなりけり。

改札過ぐれば階段昇りてホームに立つ。色褪せし列車来る。常より空きたる車輛。坐し、スマートフォン取り出だし、ニュース閲覧す。

エスカレーター左に立ちて降り、地下鉄へ乗り換へ、往き、着く。降車し、エスカレーター左に立ち地上へ上ぐるなり。改札抜け、歩く。高層の谷間に低き雑居ビルなる細き路、小神社もあり、古き繁華街など過ぎ、ブティックなるもある路を往き、大いなるウィンドウならぶビル街つれづれ眺むるうち着く。総じて五分ほどなりき。

自社ビル、エントランスはひろく、天井高し。エレベーターに乗りて勤むべきオフィス着く。挨拶いくつか。

ロッカー室に荷を置いて席に坐すや否や、電話鳴りけり。

「ああ、もしもし、おまえんとこの取り扱つてゐる製品だけどなあ」

「その件につきましては担当者が居りますので、少々お待ちください」

「何じやと、たらい回しにする気か。おまえも社員だろ、会社の物が説明できんのか、おまえんとこは、そーゆーいー加減な会社かい」

いとわりなし。つらつら考かむがふる。

かういふ輩ら、性質たち悪しき者なり。畢竟此ち方が何を言ひなむとても情を納むる處をつくらず、さらば納むるを得やうなどあらうはずもなく、それゆゑ未来永劫納得せざる者らなり。

すなはち人の屑とは言はずや。いやさ、人の屑なり。躊躇なくさう想ふ。これな

る手合ひ、此ち方が反撃せざることを知りて喚く卑怯者、下郎、下劣、下賤、反撃されざるを知りて叩く惡意者、臆病者なり。

すなはち欲求不満を晴らさむとす輩なりけり。韋眞子、かく断じて已まず。

暫時仕事を忘れ、妄念憤怒のさなかへ堕ち、脳内において自らへ向かひ、炎々と大敷衍す。

かやうなる輩は日本の恥なり。かやうなる奴ばらをれば、東日本大震災の後の混乱不安のさなか文句も言はず、列を乱さず配給品の配布所にならぶ秩序正しき素朴なる人々が世界数多の人民より称讃せらゆるも虚し。狂ほしき口角泡なる奴ら權利意識のみたる地縛靈にて、清明なるとは眞逆の惡賊なり。もし仮に貴奴らへ、かく申し述べやうならば、必ずや奴輩ども反駁し、「言わなきやよくならんだろうが！」

とかや言ふべかんめり。下衆の言葉ぞ。

言へばよくなるものかは。実績ありきや。データぞありたるやと。これ、あやつらの頻りに使ふ言ひ回しなり。

もし同じやうに、あやつら風に、かく言ひ返へすとせば、あやつらどもいかに応へむや。あたかも、やがて「稼働率は？」とぞ頻りに問へる、笑止千万なる民主党のしらうと事業仕分けがごときものなり。またこれに頻りに感心するといふ民草の無智蒙昧なり。

クレイマーども、会社にデータ在らずとぞ言へば、コピーのごとく必ずやかく言はざるや、「ほお、おまえんとはそーゆーいー加減な会社かい」とぞ。

その証拠データ在るかやと逆に問ひ返すならば、かやつら定めし逆上し、論をす

り替へ、違ふ話へと変へ、無我夢中に言の葉を繋ぐに相違なし。ありあり眼のまへに浮かぶ姿哉。その行為あからさまなり。自己肯定に必死の亡者、虚し。おのれの愚かさに気付かぬ愚昧さ極みなし。

クレームやらする輩、心充たされぬ永劫飢餓に歪む、すなはち他者を蔑みおのれの優位を渴き望むが目的ゆゑ、収まるよしなく、平収束も明解決もなし。すなはちクレイマーのごとき矯激なる驕慢者、常軌を逸せし激しき妄執に駈らゆれ走らさゆる情、憎、しつこさ、こまかき理窟、それら諸々の偏向は清く善く潔き衆には関はりなきもの。畢竟、一切の極端は惡の一切なり。

こなる者どもの惡辣なるは睿らかなり。奴輩どもは増上慢にて、いびつなる自己肯定欲の魑魅魍魎なり。醜く小さき心持で、底なくて満ちえぬ暗鬱憤懣の飢餓を満

たさむとする餓鬼亡者なり。畜生修羅道に墮つ身なり。

畢竟一切執著はかくなるものに非ざるや。ゆるに執著は悪し。

「氣にしないことだわ」

かく独りごつ。

あゝ、人は皆おのが勝手都合に随ひてもの申す者どもなり。ただ自己を叙する徒なり。心に懸けるにあたはず。儂きものぞ。虚し。沙漠がごとくに渺茫ならむぞと韋眞子覺ゆる。底知られぬ昏き宇宙なりとぞ。

諸佛の御教への説によらずとも、一切は捏造なり。つくりもの刹那の縁に抛り結び、えにし解けむものにて、あるべから非ざるなり。

さなり。人をして奔らしむる欲望や、怨恨、憤怒、くち惜しきを、飢ゑや焦燥、憤

懣、哀切、民族の恨み、宗教の諍ひ、一切は衆生を生存の闘いへ駆るがための架空。
空架のものと言へども、駈らゆれば人皆無我夢中、滾り迸らむ。

幻影なり。生存の畏、絡繰り、囹、造作、傀儡なり。操り乱舞さしめ、狂ひ奔らせむ、いとあぢきなし。虚し、車繰る鼠のごとし。

さやう、虚し、虚しきかな。吾もまた愚劣なるまゝ、下劣なるまゝ、彼の蒙昧の輩に同じやう生きればよし。蒙寡にしあればよし。されば虚しからず。憂き世にしあれども而して浮き世にしあらずやとぞ世人久しく言はずや。しよせん、たはぶれ。ささ、想ふを止めよ。

さやう一頻り想ひて後、ふつと我に返り、やや赤面す。端はしたなし。

いぎ、仕事せむ。いぎ、ささ、いぎ。

されど心未だ憤激憎恨に捕囚せられて、ノート型なるパーソナル・コンピュータ開くも心ここに在らざるがごとし。空洞のごとし。猛風荒れ狂ふ窟なり。紛らはせむとするがやう、しばしつれづれなる人のごと、そこはかたなく電子メールやら積み置く書類やらをチェックするなり。

実務が意識を甦らしめ、いくつかの事項を付箋へ鉛筆にてメモし、パソコン傍らに貼付す。キーボードを叩いていくつか照会事項へ回答すなり。机わきなるボックスよりファイルを出だし、いくつかの書面を再読す。名刺ホルダーを出だし、電話せり。

「もしもし、天ですけど、先日の件ですが、いつ頃に戴けそうでしょうか」

二、三問答の末、電話ぞ切りぬ。契約サーバーにアクセスし、昨日のデータを呼

び出せり。昨年来、会社がクラウド・コンピューティング・システムなるを導入し、社内業務のイメージ大きく変はれり。新しきよし。華々しからずや。

いくつか資料作成し、サイバー上の共有ホルダーに整理、保存し、メールにて社内と同僚らへ送り知らせけり。これ報告書へまとめ、上司へ送りぬ。写真データのサイズや色彩を修正し。

正午なりぬ。PCを閉じ、鞆を手にする。昼休み、近きリストランテ・イタリアーノへ赴く。ペスカトーレ（魚貝を使ひしマトソースの Pasta、*“漁師風”*の意）、ミネストローネ（細かに刻みし野菜のスープ）、サラダを注文し、待つ間にスマートフォンにてツイッターするなり。

注文の品来るとき、若きOL二人あらはれ、見たくもなく思ひ、願ふも儚し、

折り悪しく隣に坐す。注文し、来たりき。やがて語り合ひて曰く、

「やばい、うまくない？ バルサミコ？」

「てゆうかさー、これ、有機栽培でしょ」

「そうよ。」

書いてあんじゃない」

「そっかー。やっぱさー、自然のまゝが一番だよねー」

韋眞子、ものしと想ひ独りごち曰く、

『サラダのこと言ってるのかしら？ 意味^{イミフ}不なんだけど？

だいたい、この世に人工的なものなんてないのよ。人間だって自然の一部じゃない。他の動植物と何が違うの？ じゃ、ハチの蜜は蜂が作るから、（蜂工的なもの）

だから自然じゃないって言うの？

阿呆らしい。じゃあ、眞珠は英虞湾のアコヤ貝工なの？ 莫迦じゃない？ チエリーは桜が作るから桜工的なものなの？ それだと自然じゃないって言うのかしら？ んなわけないじゃん。

あーあ、愚かしいわ。人間だって自然の一部でしょ？ ビルも工場も煤煙もヘドロもみんな自然なのよ。明晰判明じゃん。って言うか、みんな物的現象でしょう。野菜も人間も同じよ。

人間の思考だって、植物の光合成と何ら変わらないケミカルな現象じゃん。

だって、人間は脳神経細胞（ニューロン Neuron なり）内に、インパルス（細胞の被膜にありしイオン伝達経路開き、正の電荷のイオン流入せば、負の電荷にあり

し細胞内が正となり、対して外が負となりて、電荷の正負逆転し、これをして電気的な発火現象と捉へ、インパルスと呼ぶなりけり）を起こして、ニューロンからニューロンへ伝えて、アドレナリンとか、脳内神経伝達物質を分泌して、思考や理性や感情や欲望を起こさせているだけじゃない。

ま、こんなケミカルな現象も、わたしらの側からは、全然ケミカルじゃなくって、理性や精神や愛や哲學や魂なわけだけどね。飽くまでわたしたちから見れば、わたしたち渦中の者、『内部』の者にとっては、って話だけどさ。

だとすれば、光合成が思惟じゃないって、誰が断言できるの？ 植物の側から解釈すれば、光合成がその内部から見れば、理性や、精神や、愛や、哲學や、魂なのかもしれないじゃん。

ま、思考や理性や認識や哲學があつたつて、わたしらのは、ぜんぜん「かたち（在り方）」が違つているとかで、次元が違い過ぎて比べようもないでしょうから、確かめようもないだろうけどさ。

つてことは、植物に學問や文化があつたとしても、何ら不思議じゃないんだよ。いやいや、むしろ、植物にも思惟があつて、哲學があつて、學問や、文化があるんじゃないの？　つてことは、つまり、わたしら外部からは、まったく「かたち（在り方）」、思考の存在の仕方」が違い過ぎて見えない彼らの『世界』があるつてことなのよ。

でもさー、そうであつても、ぜんぜん、おかしくないじゃん、同じく生命活動をする存在者なんだからさ。（笑）

人間は植物のこと、光合成をする生命だって見てるけど、向こうは向こうで、植物の哲學者が『人間とは、ニューロン内にインパルスを走らせる生命である』、なんて言っているかもしれないじゃない。

だとすれば、微生物や虫や魚や動物なんかのすべての生命を同じように見るべきでしょうね。そうよ、もしかしたら、山も雲も空も海もね。

だってさ、もしかしたら『かたち（在り方）』の全く異なる『生命』なのかもしれないじゃん（笑）」

午後、薄氷のごとくうすきモバイル・パソコンをぞ鞆に収め、クライアントのビ

ルへ参る。^{まゐ}初めて参上せむクライアントなればスマートフォンの N a v i アプリを使ひ、G P S 機能にておのれの動きをぞ捉へ、それをディスプレイ上に反映させつ、方向の正しきを確かめつつ進むなり。

同時に A R (Augmented Reality) を用ゐ、カメラにておのれのいましめる處を映しつ其處に附加する情報を樂しみつ、歩むなり。さやうクライアント自社ビルに着きたれば、社屋を写しつ、A R にて自動に表示す社員数・基本金・財務諸表・上場されし株価の状況等々見るともなく確認し、自らのいま爲さむとすることを脳裏に短く復唱し、自動ドアをくぐらむ。

打合せルームへ案内せられ、ブリーフケースより資料を出だしぬ。

あらかじめスマートフォンにて音声録音機能さしむスイッチを押しけり。さまざま

ま説明し、資料を指さしつ、又質疑に応へぬ。終はりき。午後三時、地下鉄に乗り、途中Cafeにて休憩、社に戻りて五時から資料を整理し、データ化しレポートを作成し、社内LANにて上司へメール提出を終へ、^を退社す。午後七時三六分。

外へ出づれば街ははや相貌を変へたり。飲み食ひの店、俄かに時めきて華柳^{はなやぎ}ぬ。

ビルは窓の灯り未だ尽きねども、既に生氣喪ひ、顔伏せるがごとし。駅に着きぬ。

朝と異なる路線に乗り、大きな駅に降り立つ。繁華なる街の空気吸ひ、歩む。イタリア風の『Bar（バー）』に寄りてサンドウィッチ抓みつ、ブラッディ・マリー呑むなり。報復復讐、血にて贖うがごとく、今日に与へらゆるストレスの呪縛を放ちつ。二、三杯を重ねし後、スマートフォンにメール着きたりき。高貴^{たかきしゅうと}柊斗。韋眞子の恋人なれども別れの文なり。しずかに睫毛を伏せぬ。

予兆はあり。覺えつも今日至るまで心逸らし過ごし来にけり。終に來たる。心ゑぐりたり。え耐へらえずば、今宵は独り呷り吞むべかんめりと思ふも、速やかに歸るを忖ふは明くる日の仕事を慮るがゆゑもあり。

虚勢といふべき、颯爽と、駅の改札抜け、車輛に乗り坐り、車掌のアナウンスとともに降り、駅まへにて慣習のまゝに、オリーブの実、チーズのオリーブ漬やミックスナッツを買ひ、バス停留所に待つも、粒々たる燦星は見えず。月光皓々たるも。雲^{くも}茲^{こゝ}くしずかに流る。夢幻のごとし。地上を現世^{うつしよ}といふは、定めし常世の写しと想へばこそなれ。現世は移らひ、崩れ、集まり、かたちを遷し変へいくなり。桜華爛漫に散れども蟬は殻を残し、芒は月に照らされさやさやと揺れ、伽藍に積む雪は凍て氷となり、陽射しに溶けぬ。季節は深く哀しき。

来たるバスに坐し、スマートフォンにて電子ブックを書見しつつも、心あらず。

いくつかの家の灯見る。暖かき色家庭をぞ想像する。夕餉の人家の灯りはいつも懐かしくも哀しからずや。沈とす。寂しかりけり。小さき場末の小酒場とかやも。汚れたる電光看板、古き欧羅巴の鎧戸擬せる小窓、雨風に打たれ褪せし狭き花壇あり。

そこはかとなく幻想廻る。想ひはムーラン・ルージュ Moulin Rouge に、ロートレック Henri de Toulouse-Lautrec の描きしポスター髣髴し、『デイヴァン・ジャポネ "Divan Japonais"』彼の哀しき Vie 想ほゆ。

しばし揺らゆるうち、アールデコふう幾何學的なる裝飾に作られし屋根と、透明の風防に広告のある停留所へ着きぬ。降り、歩道歩み、門を抜け、玄関にて暗証番号押し、エントランスに入りぬ。エレベーター乗りて昇り、廊下踏み、扉鍵を差す。

開く。灯点ず。

居間に入りて。パソコンのスイッチを入れ、液晶画面を立ち上げ、壁紙 Wallpaper あらはる。しばし眺め、嘆息し、薬液浸みしコットンを手に瞼や頬や唇をやはらかに拭き、化粧落としぬ。

メールを確認す。

疾く立ちて服を脱ぎ、シャワー浴び、寛衣に着替え、シャンパーニュの栓を開けぬ。ステムの附いた細長いグラスにすみやかに注ぐ。泡激しく亂れつ立ち上りぬ。

乾杯す。黄金色に輝く液体、美しきかな。烈しく上る虚しき炭酸の泡沫、新しき詩、あゝ。いと愛^{かな}しも。

比して世のなか醜^かき。

浅ましき事限りなし。愚昧、卑小、下賤なる私利私欲あふれみだる。損失役得への狂著妄執、厭はしく憚ましき。人よりわずかも利を喪へば激しく喚き、口角泡、妬み嫉む。一厘の利を得て有頂天に喜悦す。とても飢餓収まらじ。

悪意と欲望の大帝国無限大宇宙なり。虚し。儚し。生くるがゆゑの象りに若かざるも強し。無空なる虚しき影にて力なきなる者に打ち破らゆる吾ら無智劣愚蒙昧なり。架空・形骸・夢幻に若かざるといふに。

愛も。

愛は子孫繁栄の本能なり。

恋のため、愛し子のため、己が命さへ捨て怖れぬは、愛といふが子々孫々への望みなればなり。元糺せば、雌雄の別とは遺伝子を混ぜ、ウイルスに対するがための方便なり。型合ふウイルスに遭ふ率を減ずる方便なりけり。皆同じ型なる遺伝子にありしあらば、一つ型合ふウイルスあらはれしとき、一斉に滅尽す。さまざまなる型混在せば、いずれかが生き残り得るなり。

これ生命の意志なりと智覺す。生きやうと希ふが生命のベクトル Vektor (独) なり。生物が命を惜しむは個体存続がためなりと雖も、個体の存続といふは、畢竟、子孫を遺すが便宜なり。子孫の繁栄は種の存続なり。種の存続とは宇宙を構成せし要素の缺如を防ぐ。大いなるまろらのたまをまつたきまゝ保たむとするものなり。存在とは個体の存続を案ずる氣遣ひより起こる意識 (五蘊) にあれば、五蘊は人

を生へ結びつけむがための方便、此れに導かゆれ、紡ぎ結ばゆる空架にしかず。一切価値はこれに拠るなり。すなはち正誤善悪優劣良悪当否是非など一切判別選定然り。世界かくあり。

……かくブログに記して寝ぬ。かろなる、あたたかき羽毛の布団をかぶり、シルクの艶、滑り心地よき、囁く衣擦れ。プロテクターなるかのごとく身をくるめり。時過ぎ魂魄癒やさゆるときを持ちなむ。

さやう他力本願にて想ふは虚しからむや。さりとて、昏き夜は移らひ、星廻り、朝あしたは来にけり。

2日後、土曜、朝、青天晴。某ガレージへ赴く。整備員に声かけらゆる。

「仕上がっていますよ。奥にあります。絶好調ですよ、BB。吹けもいいし」

其處にゐる一匹の獣を愛づ。

ベルリネッタボクサーBerlinetta Boxerといふ。フェラーリ社製Ferrari 水平対向12気筒4390cc エンジン積み、トリプルチョーク・ウエーバー401F3Cキャブレター4基備へ、360HP/7500rpm なり。ミッドシップ・マウントす。いかなる哲學も死滅す乾燥地帯なり。コンピュータ電子制御などデジタル類一切在らざりき。インジェクション(燃料噴射装置)にあらざキャブレター仕様なるはいまやうならず。既に絶へし伝統なり。

モノコックのシートに坐し、ドアに手を掛け閉めればかちりと嵌まる。四点式シ

ートベルト締め、サングラス掛く。イグニッション・キー差し、捻る。轟くエンジン音、アクセル踏めば乾きたるエグゾースト・ノート響く。地も揺れずかは。受取書にサインす。

「ありがとう。じゃあ、貰っていくわ」

工場を出る。排気音のカンツォーネ Canzone を鳴り響かしめ、駆け上がりたる首都高速道路ぞ走りたる。左右に切る太きステアリング、かやう猛々しき獣を操縦するは女手には難儀ならむや。されども韋眞子、暴る獣を制御し、ウィンドウ開け、風に吹かえたり。エンジンの回転上ぐれば音高く歌ひ、彼の女の耳に管楽器のごとく聞こゆ。スピードが上ぐれば重力離れ、解き放たるれ、飛ぶがごとき sensation あり。心を解き放ち、昂らしむ神聖ありき。

これアドレナリンを噴出し、喜び湧き出でらゆるにしかずや。知らず。されど善し。とても崇むべき価うすると思はざりき。さりとてもこれの爲に生くとも、悪しきものかは。

天上の超越なる肯定をぞ爲されたるやの感覺到導かゆ。ゆる知るものかは。快ありて抗ひ難き。天祥飛躍の清爽感覺、たかくひろくすがし。天のごとく自由なる快樂、深淵なる萬充、高遠なる静謐。及ぶなし。美^{うま}し。比すべきなし。畢竟、脳内に快樂促す神経伝達物質分泌さしむこそ人生究め極む目的にしあれ。美ぞ尊き。虚しくも人の眞あり。争ひ難し。

東名高速道路に入り、心空しう走るなり。富士の御嶽が紺青を塗りたるやう映へ、あり。雪白く眩く、更級日記にいふがごとし、色濃き衣に白きあこめ着たらむやう、

あはれに見ゆるなり。

人の思惟にあらざるうつせみのまこと、神の天寵^{いつくしみ}たまひし実在せらゆる眞理に
あり。いまこの瞬^とこそ完成にあらずや。現今究竟の涅槃にしあらずや。生の意義、
一切原理、最も偉大なる公理、最も甚深高遠なる眞奥義、究極眞実、最強最烈にて
睿らかなる眞実……こなる感覺ぞ事実存在たる。実存といふ。

実存の他何を扱ふや。燦めき輝く蒼穹、永久^{とこしへ}の鐘音響かせつ。

「あゝ、春爛漫も近いわね」

かく独りごちぬ。

霽天蒼穹雲薄く、風に薰あり。韋眞子、マンションを出づる。

歩道歩めば、さやかなるさ緑の萌え葉の候。桜樹の幹には薄き緑の斑紋、鬚長き濃き苔などを添へ、華咲き始むる。冬には櫺に隠され忘れらゆるも、人春に驚きつ想ひ出だす。

歩きつ眺む。楽しまざるものかは。厳つき皺入る古樹にかくも鮮やかなる明かき桜華咲くの妙義、えも言はれじ、筆舌尽くせず、喩へなし。

バスに乗り駅に着きても、彼の女の思惟ひとも独り奔る。春は悩ましき哉。のどけき穹そらに、倦みたる夢想、朧月夜の猫のごとくに蠢き騒ぎて妄りに膨らみ、奇々怪々に爛熟し、腐敗のごとくも繚亂めぐりれ、氣怠し。

人入り亂れ混ざり雑ざる東京駅、新幹線に乗りぬ。

さて、韋眞子女いさなこじよ、春分の節にありければ里へ帰るなり。

天之家といふは眞神の里の舊（旧）家にて古くは眞神の貴族なりき。而して屋敷は眞神の邦の深き處、聖なる眞神の御山の入り口なる、杜の鬱蒼と繁りたる丘の上に建つ。集ひたる臣下の家ともがらの們と正装し、御社なる墳墓にて祖靈氏神を祀り、後に族郎党を率ゐて眞神山の大々御々社おほおほおみやしろ（眞神神社なり）を参拝す。桜下の盛宴あり。

翌朝、すべての儀を終へて復た東京へ戻るすがら、兼ねてより詣でむとぞ希ひたる畝邨ほむら（眞神郡畝邨村）の古刹、貞觀正國寺ちやうくわんしやうこくじに詣でし。小型鞆よりペンタブレットを取り出だし、山門などスケッチするなり。スマートフォン用ひて撮影す。貞觀と言へば唐にもありし元号なれども、日の本は八五九年より八七七年をいふ。歳月に相応しく古き薫り、斎々しく威嚴あり。

「この聳える感じ、風格、魂を捉えるのは、とてもペンじゃムリね。じゃあ、筆で、
つて言いたいけれど、もつとムリね。わたしには」

敷石続く老樹大木の道往けば、法隆寺のごとく廻廊に囲まれたる伽藍の偉容見ゆるなり。スマートフォン音声録音機能スイッチを入れる。自らの言を記録す。

「凄いわ。そうね、蒼穹に伸び上がるような感じ。澄んだ偉おおきさと言うか、玄く沈んだような荘厳さ、あゝ、まどろっこしい。舌が縛もつる。五重塔は東寺より大きく見えるわ」

韋眞子、門をくぐりて廻廊の中に入りぬ。男ありき。金堂の石段に坐し、五重塔をスケッチせし。眼鏡し、黒髪整へ涼やかなる顔立ち、指は細く長き。風情に惹かれ、しみじみ眺むる。

洗ひ晒せしリーヴァイス Levi's 穿き、破れしコンバース Converse オール・スター All Star ぞ履く。左手首にパテック・フィリップ Patek Philippe のカトラバ Calatrava あり。

未だ春浅くも白きシャツのみにて、頻りに鉛筆を走らす。韋眞子、高さ五十五メートルといふめでたき塔を仰ぎつつ過^よりて金堂へ上がらむとし、その描きたるを見し。

見ればあやしき奇しきとぞ覺ゆ。大和葺の裳階屋根、高欄、雲形斗栱、頂上の相輪ぞ精しく描ける。

「昔の建築を研究しているんですか」

意せず韋眞子、かく問ひし。男、問ひに一瞥さへ与へず、あさみし言^{こと}ざまにて、

「いいえ」

「あ、すみません、その、デッサンされてるかと思つたら、そうじゃなくてパーツの筆写してらしたから、ちよつと驚いて、思わず声掛けてしまいました。『ああ、教えて写真じゃなくて、筆写で記録する研究方法もあるのか』とか思つて……」

「デッサンです」

石のごとき表情にて抑揚なく言へり。韋眞子、棘々しき気持ち生じ、

「え、何よ、その言い方。そんな建築の図面みたいなパーツの絵描いてりやあ、研究かなつて思うの当然じゃない!？」

「いいえ、絵のためのデッサンです」

「はあ？」

悪いけど、図面にしか見えないわよ。そうね、パーツの立面図か、展開図の部分みたいなものにしか……」

「別にこれをそのまゝ絵に使うわけじゃない。飽くまでも準備だ。資料だ。そういう意味ではあなたの言うとおり研究です。下地にするんです。

表に出ない部分も知らなくてはリアルな絵は描けない。すべての方向や角度から見ただ全体像を知らなくては生きた絵は描けない。生きた線は引けない。リアルな像を結ぶことができない。当然の話だと思うが。リアルはすべての細部の総和だ。見えないからと言って存在しないことにはならない」

「そう？ 見えるってことが実在の根拠になるのかしら」

「見えないことは非存在の理由にはならないと言っただけだが」

「そうですか。そうでしたね。

失礼しました」

さう言ひ、頬膨らませ、金堂へ上がり、須弥壇上に仏・菩薩、諸天の像を拝み仰ぎぬ。仏や菩薩の螺髪、白毫、肉髻、尊し。宝冠や瓔珞ようらく、臂釧ひせんや腕釧、金箔の光背、炎の後背を恍惚と観る。

菩薩の裳裙もくん、その紋様、いと奇しく、正面中央部と左右各々の前後の計五箇所に襷を作り、石帯といふ紐にて結ぶなり。インド古典舞踊にても同様らし。細長い条帛じやうはくを左肩より右脇下へ通し、背中より再び肩に回して左胸にてその布端ぬのはしを、左肩・右脇へ通せし布の下へとくぐらす。天衣てんねを肩に回し手に掛けるなり。

天女は唐代貴婦人のすがたなり。裙裳くんもの上へ、がい襠衣とういを着、肩はしに背子、まへに蔽へい

膝^{しつ}を垂らしむ。腕は長袂衣^{ちようけつゐ}、襯衣^{しんゐ}、鰭袖^{ひれそで}。腰に緒を結び、沓^{くつ}を履くなり。

神将は胸甲、籠手、前楯^{まへたて}（腹甲）、胛甲^{すねこう}、腰甲、肩甲などの甲冑とともに天衣、裳

の下には袴を身に着け、沓を履くなり。

眺むるほどに天界の光景、眼のまへにひろがり、五色の雲やら光彩陸離にて、厭はしきこと数多ありてもやがて忘らゆる。ぎやう（形）さまざまなりて飽かず覺ゆ。

藝術は心魂を癒やすなり。神聖崇高は心を霽らし、清らかに澄み明らめ、かろろさやかにすなり。これぞ生命の粹^{すい}、精髓と知らゆる。

元来一切アートは祭祀なり。祭祀は現実の用なり。藝術は現実乖離せず。

ラスコー洞窟 Grotte de Lascaux やアルタミラ洞窟 Cueva de Altamira の壁画を想へ。狩りたき想ひの実現、希ひの成就が行爲され、洞窟壁面に表象せらゆるなり。

縄文の火炎土器、殷の青銅器を見よ。生活、儀礼儀式、神への崇拜、畏敬に美を求め、美を生む。

また曾て語り部の語りしすべての物語は歴史にしありて事実なりき。それゆゑ眞実の迫る情あり。人は涙し、勇気を鼓舞し、精神を涵養す。

人は現実を強く念ふ。架空を求むも現実を変へたき希ひなり。すなはち現実への欣求が動機原因なり。また現実逃避もあり。現実への心深きがゆゑに心疵痕し、これを逃れむとぞする。

一切現実へのゾルゲ Sorge (関心。気遣ひ) なり。畢竟これ自らの未来への意識より生ず。自らの生命を尊ぶが原義なれど、すなはち子孫繁栄、またもや種属の存続への希求説に遂する話なり。

一頻り考へ、韋眞子は立ち尽くすおのれに気づけり。心既に清められ、清々しく善し。

「さあ、行こう」

堂を出でて階に戻れども、既にすがたなし。五重塔など眺む。柱に龍神の絡む、深きいはれあらむ、ゆかし。

再び想ほゆ。

藝術は樂し。祭祀なり。裝飾なり。歴史なり。日々幸あれと望む生活、心昂らせ
歡ばせる飲食衣裳家財道具、誇らかに魂高めし民族の事実、すなはちすべて現実への
関与なり。

境内を廻り終へ、駐車場へ赴き、レンタカーに乗る。イグニッション・キー捻り

き。

樹齢重ねし高き老木列する古街道を走るに、背後に天蓋のなきアンティーク車を見附けり。

「フルオープンにしたベントレーだわ。二〇年代か、三〇年代の古いやつ。この季節に幌外すのは早過ぎない？」

て言うか、昔のイギリス空軍みたいな革のヘルメットに、ゴーグルつて、何なのよ。典型的な *Anglofile* (イギリスびいき) ね」

スマートフォン鳴る。マイク附イヤホンを片耳に差し込む。差し込むと同時に通話始まりぬ。

「もしもし？」

「あー、韋眞子か？　そうだろ？　昨日、そのヴェイロン Bugatti Veyron 16.4におまえが乗っているのを見かけたんだ。BBはどうした？」

「誰？」

「早蕨だよ、いまおまえの後ろを走ってる」

「え？　ベントレーの男、轟佐くんだったの？　そっちこそ買ったの？」

「ああ、そうだよ。スピード・シックス Bentley 6½ Litre & Speed Six ち」

「つて、マセラッティ Maserati GranTurismo はどうしたのよ」

「あるよ、東京に置いて来た。2台乗って来られないからね」

「ええ！　両方とも東京で使ってるの？　てつきりこっち（眞神郡）で乗るための車かと思ってた！」

「想い込みだね」

「ふつうだよ。何で交通の発達した東京でそんな車2台も持つ必要があるのよ、不経済じゃん。駐車場とか高いでしょう」

「価値観の相違が思い込みを生む。おまえ、すっかりヤマトに染まっちゃったな」

「世界共通の価値観よ」

「僕らは眞神の部族だぜ。他の連中とは違うんだ。あゝ、これはくだらない選民意識さ。そういうおまえこそどうなんだい」

「わたしのはレンタカーよ。こっちで借りたのよ」

「僕はその方が驚く。どこにヴェイロンのレンタカーがあるんだ」

「あーら、此處は眞神よ。ヤマトとは違うのよ」

「ふざけるなよ、そうか、天之家に自動車販売している家があったな」

「そう、哥舞伎くんが世話してくれたわ」

「あゝ、カブキって、天之哥舞伎先輩か！ それでわかった」

「ところであなた、その車で来たことは東北地自動車道で帰るんでしょう？ わたしとは方向が違うわ。海の方へ行くから。安房市で返すのよ」

「そうか、じゃさよなら。次の信号でお別れだな」

「2 kmくらい先よ」

「わかってる。それよりおまえの運転が荒いのが気になってるんだ。何かあったか？」
韋真子、息やや止まるも、

「ああ……さつきちよつとムカつくことがあったのよ」

説明す。

「へー、大したことじゃないじゃん。

たぶん、そいつはいしたたみりおん 甃璃厭じゃないかな」

「リオン？ うーん、甃つて聞いたことあるわね」

「そりゃそうだろ。眞神族の一家だぜ。平衛家の臣下の赤門家の臣下が甃家だ。武門の家柄だぜ。僕らより二つくらい年上のはずだ」

「あまり見かけなかったわね」

「イタリアに絵の勉強で留學していたとか聞いたけどな。詳しくはわからない。小さな展覧会にも出品しているらしい。眞神のあちこちで写生してるって聞いたよ。同じ私立眞神校だったから學生時代に見かけたことがある。おまえの言うような、

そんな風貌だったはずだよ」

「へー」

「じゃあな、また」

「うん、どっか美味しい店教えてよ」

「フレンチで、つまりラ・キュイズイヌ・フランセーズ la cuisine française だ、いいところがあるよ。青山にね、『アジュール・ド・プルイ Azure de pluie』のち」

「わかったわ」

「ご馳走さん」

「独りで行くのよ。決まってるじゃん」

「独りの食事なんて最低だな。何事も心啓いて通じ合い、共感できる友がいるから」

楽しいのに。

人生は楽しむ事が目的さ、快感を齎す神経伝達物質を脳から分泌させること、それが人生の目的だ。物的で、無味乾燥な見解だと思いかもしれないが、事實は事實だ。悟りも解脱も正義の崇高感も、愛の高揚感と充実も、自己犠牲の潔い気持ち良さも、あらゆる満足も、科学や哲学に於ける達成の歓びも、すべては結局、そこへと収斂されてしまう。

事實は曲げ難く、異論はあり得ない。

…以上、Q.E.D (証明終了の意。ラテン語。Quod Erat Demonstrandum)」

「だから何？　そういう気分なのよ。それがすべて。じゃあね」

「らしいな。どうやら機嫌が悪いのは璃厭のせいじゃないようだね。どっちかって

言うと、彼はとぼちちりを喰らったみたいだな。じゃ、また、今生で」

安房市にて車返却し、秋田新幹線に乗りて秋田駅へ。盛岡駅へ向かひ、東北新幹線に乗りぬ。旅行鞆ポケットよりタブレットPC出だす。メールチェックし、会社へ二、三通報書送りき。やがて企画書作りして一時間過ぎし、終へてそのまゝタブレット用ひて読書を始むるなり。耽りぬ。車輛の静かなるなめらかな揺れ、樂しふつと思ひ立ち、スマートフォンに検索す。タブレットにて『美味礼讃』を読みつつ。言はずと知られたる美食學Gastronomieの大家なるブリアール・サヴァランJean Anthelme Brillat-Savarinの名著

を^{をし}教へらえし『アジュール・ド・プリュイ Azure de pluie』ぞインターネットにて調べにける。

いはゆる新フランス料理以前の料理を扱ふ料理店なり。すなはちヌーベル・キュイジーヌ *nouvelle cuisine* (伝統的なる重厚ソースのフランス料理を、素材の組み合わせの妙によりて飽きのなき、従前に比し軽めなる味にて仕上げる他に、伝統的には使はれざりし素材やら料理方法やらを用ひて作るフランス料理) や、キュイジーヌ・モデルヌ *cuisine moderne* 以前の料理を出だす店なり。

「ははん、面白そうね」

東京駅に着く。着くや否や、スマートフォンをぞプッシュする。アジュール・ド・プリーを来週火曜に豫約す。

さてその日こそ韋眞子大いに期待し、独り犀の角のごとく赴くなれ。午後六時に表参道駅を降り、外苑へ向かひて南青山を少々歩く。店の外観、ユトリロの白の時代を想起さしむるなり。されど近づきて身の凍り固まるを覺ゆ。

ガラスの窓にキャンドル、ゆらゆらせし炎にシルエットなすは高貴格闘、韋眞子の知らざる女と談笑し、食事せるを見ゆればなり。一刹那、帰らむと想ふも、敢然と歩を進めるなり。名を告げ、ウェイティング・バーにてキール・ロワイヤルを舐め、氣高く冷厳なる女王のごとく威を崩さず。

「お待たせいたしました。お席のご用意ができました」
銀髪慇懃なる給仕来たりてさう言ふ。

「案内してください」

歩み入るも終斗は気が附かず。傍ならざれば不思議なし。席は彼の方より見れば陰なる場所ゆゑ見らえぬ安堵と見らえぬ不満と双方を覺ゆ。

「こちらでございます」

「ありがとうございます」

白く眩きテーブルクロス丸き卓、給仕が椅子を引く。坐す。バカラ社製のクリスタル・グラスならば、手まへより白ワイン用、シャンパーニュ用、赤ワイン用、ミネラルウォーター用の4種類なり。

フォーク、ナイフ、スプーンなど銀器の類や、セーブル焼のあでやかなる器、アルジャンティエによりて寸分の狂ひもなくならぶ。卓上に花添へられ、テーブルクロスは絵柄美しきハルモニアなす。崇高なる完成なり。

韋眞子、満たさゆる深き笑みを泛べ、それらを眺む。而して柊斗の方を盗み見す。見らえず。焦燥を覺えつつも、見むと努むるべき義務を免れたるかのごとき安堵あり。アンビバレンス *ambivalence* なる情^{しん}。

前菜はフォアグラにシャトー・ディケム。ボルドーの貴腐ワインの逸品、柔らかなめらなる甘口にて、フォアグラとの組み合わせは絶妙なりき。心天に舞ふ。藝術は美し。柊斗などいかにばかりにあらむや。

シャトー・ディケムをひとくち口^{ふく}に啣みき。フォアグラをナイフとフォークにて切り、噛みしめ、とろけるがごとき味の妙に恍惚さへ覺ゆも、かつてこなる貴腐ワインをぞノルマンディー産なる仔羊と合わせしとき、同じ感覺せるを想ひ起しし。

海に近き草を食みし肉汁は海鹽の旨み豊かにて、シャトー・ディケムと組み合わせ

すこと善事の極みなり。

メインディッシュはカナール・ア・ロランジュ Canard a l'orange（鴨胸肉のオレンジソース添へ）なりき。濃厚なる鴨肉にさやかなるオレンジかな。

首にメダルを下げてたる白髪フランス人ソムリエが笑み浮かべつつ訪ひしとき、韋眞子はサン・テミリオンにすべきか、ポムロールにすべきかを迷ひたり。いずれもボルドー-bordeaux ワインの雄にて、ドルドーニュ河の北にあるなり。

「さて。ローマ人も愛したボルドー。その数あるワインの中にて、力強く、香り高く、タンニンを多く含み、ボルドーのブルゴーニュとも言われる両者のうち、どちらにしようか。難しい問題ね。

ふーん、いいわ。きめ細かく芳醇なブーケ、濃いルビーのポムワールも捨てがた

いけれど、今宵は八世紀の修道僧、聖ミリオンに敬意を表して、麗しきガーネット色に勝利の凱歌を歌わせましょう」

慇懃なる給仕が銀の皿に載せたる料理をワゴンにて運び来たるなり。鴨まるごとの形せしそれ、キヤラメルベースのオレンジ・ソース、肉の焼き色と合はさり、濃き飴色に輝けり。眼のまへにて切り分けしそれ、セーブル焼の華麗な絵皿に盛る。

「ううん、最高ね」

ひとくち啣み、満面笑みなるもその刹那、

「あはは」

常ならぬ高らかなる笑ひ聞こゆ。あさましと思ふも、韋真子のフォーク、ナイフの動き止む。聞き覚えありし声にしあれば。紛ふことなし。柊斗なり。訝しく思ふ

哉、彼の男、さやう喜怒哀樂を示す事稀にしあれば。度し難し。止めたるフォーク、ナイフ、小さき音立たしめ、皿の上に擱くなり。心に炎生ず。ほむら

韋眞子とともに過ごせるときいかなる折にありても、かやうなることあらざれば、胸郭に焼けるやうなりし熱く苦きもの奔りけり。苦く黒き血がどす黒き噴煙のごとく全身を駆け廻るなり。

人、笑ひたる因なくば笑はず。因あらば果あり。すなはち格闘の笑はざりしは笑ふべき因なければなり。これを恨むは頑是なきなり。幼少児のわざなり。さやう知りたれども、心滾り已まず。焰獄の火叢のごとし。切なきこと限りなし。

席を立ちたり。手洗ひへ行くやう歩み、横眼に見むとするも儚し。ただしずかに相見つめ合ひ睦み合ひて食事せし二人あるのみなりき。

かつて其の場處にて睦みたりしは自分なりとぞ想へば儚し。勘定済ませ、其處を出でたり。楽しみに想ひて今日を迎へ来たれども、徒いたずらなりけり。

愚昧を爲すべからずと想ふも、心は念ひに従はず、涙頬に伝ふ。外は寒くなりけり。風冷たく、雨なりて桜華散り舞ふ。心に留めるなく、歩む。行方知らず。

こころおち

惘然して雨に打たゆれ叩かゆるまゝずぶ濡れ、公園に悄然と坐す。まへ髪額に張り附きて流るる雫、鼻筋に伝ひ、唇曲がりて顎に溜り垂れつつ落つ。虚し。

「どうしたんですか」

面を上ぐれば警官なり。

「いいえ、何でもあります。大丈夫です。失礼します」

韋眞子急ぎ立ち上がりて眼を伏せ俯き去る。

高貴終斗は東京大學大學院數理科學研究科の學生なり。韋眞子は數理といふを、世俗を超へ清冷なる純粹論理たると想ひあくがれ、知り合ひし日に恋するなりけり。彼の女のまことならざる想ひ込みに奇蹟のやうに合致せる男なりしかば已むを得ずとすべしや。

さ迷ふまゝに午後九時も半ばなりき。寂しき路なり。狭き道なり。街燈あるも、昏き道なり。我が身いずこにあるやを知らず。ただ異界を眺むごとくアパートや果物屋、酒屋や本屋を眺む。さなる中に小さき画廊あり。

サイケデリックなるガラス傘付き照明に惹かれ、寄るも、よく見ればさにあらず。

エミール・ガレ Charles Martin Émile Gallé のうつくしアール・ヌーボー Art Nouveau 様式なり。複数名の無名なる若き藝術家らの展覧会らし。

油絵やオブジェや写真さまざまある中に、水墨画あり。没骨法にて、すなはち水を引き濃淡の墨を滲ませばやかし、巖に、鬱たる杜に、岩迸る清流、墨痕のごとき藁屋根の納屋や籠盛れ^{こも}上がれる岡を描けり。澄みたる景色なり。吸ひ込まゆるがごとく、しずかに心布地に沁み逝くこそ癒さゆれ。清涼の寂莫さやかすがしき。従前より見えし没骨の妙との相違、すなはち精緻にあり。およそ没骨と細密画とは水油のごとく合はせらえざるものにしあれども、墨調のきよらかすかの幽玄の妙に拠りて、合はざるものが合ひ、奇蹟のハルモニアぞ生れ^あ在りし。美なり。

「素敵だわ。凄い。いい、いい。」

その名を見遣れば、あな、

「甃璃厭……」

以来、韋眞子はおもにインターネットを通し、璃厭の絵を探すなり。さうしてさまざま観る。眞神を画けると想へる風景多かれど、古き西欧の街など描くもあり。また歴史、神話とかやの素材も試みけむ作あり。

龍神の図を覽ずれば胸すくがごとく想ひ、いと好ましく思ほゆ。細密精緻は鱗の一つ一つの奥行やら構造やら素質やら手触りやらまでも晰らかにせり。鬚や鬣もしかり。視覺により解析せる科學のごとし。現実へ眞に迫る。眞実の魂魄に触るなり。現実を創るのごとし。

「これは哲學だわ。論理に拠らざる哲學。東洋的な、眞の哲學だわ」

ツイッターに璃厭のアカウントを見附く。展覧会の告知などをツイートしてをり、当人に相違なしとぞ思ふ。フォロワーとなるもフォロー返しなし。時折ダイレクトメールせば返信あるも、当たり障りなき返事のみなりき。

七月、展覧会の告知あるを見て、熱き陽射し、紫外線の肌を焼かむとすをも顧みず、往く。来たる廿三日、同じ画廊にて催さゆるらし。展覧会の名は『美^{うつく}し、眞^{まほ}秀^{みづ}

Evolution』なり。韋眞子、盛夏の候、額の汗ぬぐひ、白く炙らゆれ、気怠き静寂にあり。狭き路なるも街路樹豊かに木漏れ日ある其處に画廊、夜見しときとは趣き異にしてたたずむ。

人僅かなるはあへなむ。それもさやかに思へ、豫想にたがひ、表情を強張らすもなく入る。璃厭あたり。会場奥にありたる肘掛付の椅子に脚組み頬杖突きて坐す。

半ば翳りて都会に墜ちけむ墮天使ルシファーLuciferのうつつ。

ルシファーの名は明けの明星を意味せしラテン語（ルーキフェルLucifer）に由来す（因みにフランス語・スペイン語・いずれもLuciferと綴る・にてはルシフェル、イタリア語はルチーフェロLucifero、ロシア語にてはリュツィフェールЛютцѣфѣл）。黒髪は幾分伸びかつ亂れ、眼窩には隈深くあり。瞼は二重といふよりか三重五重八重なるやう見ゆ。双眸茫然とし、焦点合はず視線の行く先、渺々たり。

韋眞子、眉顰め訝しくぞ想ふ。『いったい、彼に何があつたのかしら？ やつれたように見えるけど』

歩み近づきぬ。

「こんにちは。貞観正國寺でお会いしましたよね」

璃厭は定まらぬ焦点を急ぎ集めて見返すも、思考まとまらず、さやう唐突に話しかけし韋眞子が何者たるか記憶になき表情。女、大いに戸惑ふ。

「そうですか。すみません、憶えていません。どうぞごゆつくりご覧になっていただく下さい」

「ありがとう」

大いに失望するも、あへなむとぞ思ひ、心収めむ。已むなく画廊をそぞろ歩き廻りぬ。油絵とオブジェが多し。水墨は璃厭の他になし。されど少数派は璃厭のみならず。銅版画もさやうなり。ブラックボードに白きチョークで描けるもさやう。

珍しきを楽しむも、韋眞子、或るオブジェに気懸かりするなり。

人のかたちのオブジェなり。無表情なる昆虫のやうなりし顔の空莫がいかで乾

きたる寂しさにも見ゆる。手足細く、餓死せし人のごとし。さやうなれども鮮やかなる唐紅やオレンジや朽ち葉色やショッキング・ピンクにて染まり、肉や血色とも映えるなり。タイトルは『嘆きのアリアドネ』。

なにゆゑ、さやう名附くるかゆかしくもさだかならず、それタイトルと実像にギャップあり、日常茶飯にあらざる深淵をぞ垣間見さしむる。

隣には同じやう、人型ありて蒼碧や翠緑、焦げ茶色や黄橙色に染められ、長きドレッドヘアを靡かせ、黒き双眸大きく、泣きたるにも見ゆる儚し。『血の滴るヨハネスの首を提げるサロメ』と名あり。作家名を確認す。『いいさの あみ』とぞある。心に啓く雷霆の閃めきあり。

頤を挙げ、首を回し、周囲をにらむ。それらし人物なし。獲物待つ狩鷹のごとく

待つ。幾時も苦痛覺ゆるなし。

「やあ、できたのかい」

「持つて来たわよ」

交はす声聞こゆ。長き顎鬚の男と語るは、紅と桃色を交へたる薄明く柔らかき髪
軽ろやかに波打たしめて肩も隠す若き女なり。フォーマルなる黒きジャケットにパ
ンツにて、年頃、韋眞子とさほど差異なしとぞ見ゆる。

「彼女に違いないわ」

さう確信するなり。違はず。璃厭は顔を背け更に俯く。女、男のしぐさを知りて
か知らずにてか、一瞥さへ与へず、オブジェのまへに立ち、包みより黒きレースと
ゴールドのロザリオを取り出だしたり。『サロメ』に掛くるなり。

「これよ。」

ここにおいて初めて気が附いたの。何か足りないってね。アトリエにいるときは完成だと思っていたのに。やはり外に出るべきなのよ。外の刺激で初めて生命が独立するんだわ。わたしじゃない何か動き出すのよ。彼女が自分を主張してもっと生命が欲しい、って言うんだわ。藝術って、作家の所有物じゃないってことよ」

そう言ひて、シガリロに火を点けるなり。禁煙なれども意に介さず。

韋眞子近附く。

「凄いわ。」

あなたの作品ですか」

強く瞭かなるマスカラの眼を睜みひらき振り返り韋眞子を見る。

「ありがとうございます。黒いレースをショールみたいに被せたかったのよ。何となくヒスパニア的であり、カソリック的でもあり、レクイエム的でもあって、缺けていた何かがこれで加わったのよ。

とても刺激的。見飽きないわ。残虐で、エロティックで、空想的で、乾燥的に非情なキャラクターとの組み合わせは本当にさまざまな連想を生む。イメージの宝庫よ。

タイトルとの組み合わせもアートの一部なのよ。サロメの物語の文学性が異なるもう一つのソースになって、味わいを複雑に深めるのよ。深遠なシンフォニーだわ。精緻で微妙な Harmonia…魂のエクスタシー…

そうよ、わたしの藝術は Conceptual なのよ」

双眸を輝かせて熱烈に語りし彼女は日本人のやうにあらず。この強き個性が璃厭を激しく惹きけむとぞ確信しける。されども炎と氷の叶はぬ恋にありせば、Sensibleなる彼の人、さやうにやつれき。その因、この女にあるを韋眞子悟るなりけり。

「素晴らしいわ。あなた、とても情熱的なのね」

「あはは。ごめんなさい。」

つい夢中になってしまふのよ。莫迦みたいでしょ？ でもいいの。気にしないわ。わたしには世間一般の習慣の方が陰湿に見えるのよ。陰険にね。堂々自慢すればいいんだわ。心に思っているなら。隠すのは自分を善く賢く見せたいからでしょ？ それって道徳的な？ 倫理的なの？ わからないわ。わからないから考えたくもない。

もし世間と肌が合っていればアーティストなんかにならなかったかもね。もし人が皆樂園に生きていれば科学も藝術も哲学もなかったと思うわ」

「あなたはとても魅力的よ」

「ありがとう。あなたは何か創らないの」

「わたしは自分の人生が**トモ**なの。砂絵みたいなものよ」

「あはは。あなたも自信家ね。人のこと言えないわ。でもそんな気がしてた。あなたのファッション見てね。実はここに着いてから最初に眼に附いたのよ、自分の作品を差し置いてね。滅多にあることじゃないわ」

「光荣ね」

「ねえ、わたしがあなたを見て何を連想したと思う」

「わからないわ」

「少しくらい考えてよ。人物よ」

「誰かしら」

韋眞子、『そりや人物でしょうよ』と思ひつつ、何とはなく誰を想ひしか想像さゆれど敢へてそれを言はず。

「ジヨルジュ・サンドよ」

「うれしいわ。サンドは好きよ」

「そう思ったわ」

「でも男に憧れているわけじゃないわ」

「それと思つたよ。説明できないけど」

「説明では何も理解できない。ただ言葉の羅列があるだけ」

「そうね。」

ああ、何だかお腹空かない？」

「スペイン風のバル Bar が近くにあるわ。よく行くのよ。わたしもこれから食事するつもりだったの。行かない？」

「是非。わたし、茨城に住んでいるからこの辺はよく知らないのよ。方向音痴だしね」

「わたしもよ。でも食べるのって、好きだから、そういうことだけは詳しいのよ。東京で暮らして一年くらいだし、東北の田舎育ちだから、わたしも本当はよくわかっていないわ」

「食べるのって大事よ。人間は最初に腸からできるのよ」

そう言ひて周囲を顧み、

「じゃ、わたし、ちよつとこの人と出掛けるからさ」

さやう言挙げて出で立つ。タクシー停め、行き先を告ぐ。

バル『Una Sirena Bonita』に入りてビールとサングリア、ミネラルウォーター、パエリア、アンチョビの浅漬け、タコのガルシア風、豆の煮込みの小皿盛、イベリコ豚の生ハムのチーズ添へ、など注文す。

「さあ、乾杯よ。¡Salud!

あみがさやう声を上げ、呑み、頬張り、止めどなくしゃべるなりけり。

「そして、それでね、それが……………」

韋眞子、しみじみ女を見、これが璃厭の愛し人とぞ思ひ、bitterを嘗むるがごとし。されどもまた、アペリティブ *Apéritif* のシェリー酒を舐むるがごとし。いかやうにも人、人生を美味なるとせむ。さこそじねん（自然、爾然）の性なれ。

アブサンラ・クール *Absenta La Cour* の杯を重ね、韋眞子、遂に言へり、
「たぶん、あなたは知ってると思うけど」

「璃厭のことね」

「やっぱりわかってた？ あなたは自分で言うほどあけすけじゃないわ」

「あはは、そうね。企みのない人間はつまらないわ。愛憎は人生にとってシナモンや畢撥ひはつのようなものよ。魅力的な香辛料だわ。グローブ、山椒、ローリエ…、美味しいでしょう？ 美味しかったと言うべきかしら？」

さやう言ひ、さやかに笑みて片目閉じ、睫毛のヴェールを眸に翳すウインク。さらに言の葉を繋ぎ、

「でもね、彼はまだわたしに告白していないわ。きつと、わかっているんでしょうね、イエスっていう返事がもらえないことを」

「そうかもね。あなたは彼を好きになりそうなタイプじゃないわ。彼にもそれがわかるのよ」

「そう。・・・たぶんね。」

でも人生はどんな奇蹟が起こるか分からないし、好きなら慕^{まつしぐさ}地でいいと思うんだけど。彼はそういう人種じゃないのよ。ま、だから、わたしみたいな女に好かれな
いんだけどね。フュシス *physis* (自然) の摂理ね。自然淘汰だわ」

「そうとは限らないんじゃない。雌雄が分かれているのは遺伝子をシャッフルさせるためのよ。異なる遺伝子を混ぜるのが自然の摂理の目的だわ。むしろ、あなたが彼を好きになれない、彼には恋することができない、つてのは近しいからかもしれないわ。逆に言えば、わたしが彼を好きなのは遠い存在だからなのよ、きつと。

……いまわたしがあなたと合うようにね」

あみ女、髪振りて大らかに高らかなる声上げて笑ふ。

「恋は知性を曇らせるのね。あなたらしくないわ（会ったばかりでこう言うのも何だけどね！）。人間ってそんなに単純なの？ 共通点や共通の趣味がある者同士が惹き合うのは、なぜなの？ 一緒にいて楽しい人が好かれるのは、なぜなの？

わかり合えることが愛し合うための大きな要因になるからだわ。人は強い絆と繋

がりを求める。それはそれで生きるために必然的なもののよ。人が社会的な生き物なのは、集団で助け合わないと生きていけないからだわ。

だから理解し合うと脳内に快感物質が分泌されるのよ。それを餌に、その行為を頻繁に行わせるためのよ。

厭世的かもしれないけれど、事実だわ。無慈悲な事実は、大航海時代にヨーロッパで金よりも高価だった胡椒のようなもの、あるいは最上の鹽、強い香辛料のようなもののよ。

ニーチェも理性を本能のうちに数えるべきと言ったわ。愛も生存の原理に支えられた本能なのよ。脳内麻薬に餌付けされて、それを欣求しているだけなのよ。あゝ、素敵だわ。獣よ。

そうよ、結局、人が愛を尊ぶのも、そういった理由からだわ。愛はけして崇高でも美しくもない。天上のものでもない。

ねえ、これって、わたしよりも、むしろ、あなたのような人のセリフじゃない？」
韋眞子、まことさやうなりとぞ思ふなりける。

「そうね。本当にあなたらしくない、厭世的な、懷疑的な科白ね。

でもさ、それが Ambivalence なあなたの魅力の深さなんだわ。彼はきつとそれも好きなのよ」

「それって嫉妬？ あゝ、楽しいわ。タンニンの強い葡萄酒のようにね。生牡蠣のように美味だわ」

「それを楽しみたくて食事の誘いを仕掛けたんでしょ。わかるわ」

「そうよ。あなたの企みが見てみたかったの。だから『お腹が空いた』って言ったのよ。まあ、けして嘘じゃないんだけれどね。ふふ。

ねえ、会った瞬間から、何か恋愛がらみだって感じていたのよ。なぜだかは知らないけどね。でも、まさか璃厭のことだとは想像していなかったわ。

まあ、ここで少し話すうちに、すぐわかったけれども」

「あたり！ …って、言いたいところけれど、正確には少し違うわ。わたし、あなたとこうして食事して、話して、それでどうするつもりだとか、どうしたかったとか、全然わかんないのよ、いまだに。ただ衝動で、あなたに触れずにはいられなかった」

「わかるよ。でもさ、彼があなたを好きになるかどうかは、まだ全然わからないの

よ。だってまだ知り合っていないし、何もわかっていないでしょう、お互いに？ もしかしてわかつちやったら、あなたが彼をふつちやうかもね。あはは。

未来はまだないわ、 L'avenir n'existe pas encore.]

「そうね。それに Le passé n'existe plus. (過去は既に存在しない)。

何でフランス語なの？」

「経緯^{いわれ}なんかないわ。そんなもの、現実じゃ役に立たないじゃない。強くて美しいことがすべてなのよ。あはは」

その呵々大笑こそ古代希臘のアポロン Απόλλων の耀く車馬のやう空を凌駕し、天翔るなりけれ。

銀座の中央通り近くにありて、靴の木型（ラスト Last）より起こし作成する店あり。韋眞子頻りに英国などへ発注し、木型より起こし靴作らしむも、不便ありて、国内に店を探し、うち一つに、頻繁に作製を依頼するやうなりたる。

今日は新しきブーツに新たなる木型を作るとて、さまを看、皮革の吟味も兼ね、銀座を訪ふなりけり。

「わたしを莊嚴するにはさまざまな方便を用いなくてはならないわ。たとえば眞言宗の僧侶が塗香し、身密口密意密を整え、灌水して三鈷杵や十字金剛羯磨杵を手に念じ、魔を裂き、印契を結んで護摩壇を焚き、觀想によつて五色の雲や水晶や七宝や紫摩黄金で莊嚴された道場を現象させ、その至高の空間で宇宙主宰の法身仏と合

一するようにね」

3Dスキャンやら石膏による型取りなどにあらず、敢えて手作りせらゆる木型に拘るは、すなはち刹那のかたちを写せるとて、うつせみのフィットの感に繋がらざる、といふ現実理の妙義あればこそ。工匠職人の知識と経験の総和なるもの、すなはち勘に拠るしかあらざればなり。

韋眞子、靴屋に着きて小さき古き店の奥なる靴用ミシン置かれたる作業部屋に入る。油や墨に汚れたる、疵あまた付きし革の前掛けしたる職人の、キップ（生後6か月より2年くらいの牛からなる革。なを生後6か月に満たぬ仔牛よりなる革をカーフといふ。カーフは疵少なく、しなやかなれども、キップ革は強度と厚みに優る）に型紙を当て、革包丁にて裁断するを見ゆるなり。

「これですよ。ちようど、ご注文の革を手裁ちしていたところです」

「グッド・タイミングね。さすがわたしだわ」

職人頭、眼を丸くし肩を竦めぬ。

革を手に取りて確かめ、また初めて見ゆ木型を撫で、愛でたり。まみ

「美しいわ。藝術ね。実用の藝術。眼を樂しませ、肌を樂しませ、鼻腔を樂しませ、歩みを樂しませる。あゝ、美しい。傀儡であらうとも。

そうよ、それでも敢えて果たすのよ。

生活を賛美し、生を肯定する、自分を飾り立てる本能は間違っていないわ。子孫繁栄の法則とも合致するし。ふふ」

さやう言ひて髪靡かせ、狭く種々雑多に物散らかりたる作業部屋を、身体より発

する光輝にて照らす女王のやう、韋眞子女は振舞へり。

靴屋の用を済ませども帰らず、外堀通りに出でて、銀座6丁目交差点にて曲がり、並木通り（銀座7丁目）のルイ・ヴィトン Louis Vuitton に入りぬ。ヴィトンと言へば、モノグラムなるが人気と言へども、敢へてマルチ・カラーを選ぶ癖ありき。

マルチ・カラーのブラスレ・ラック・イット Bursure Rack It (仏:Porte-Bursure
Ⅲ) をぞ以前購入せしことある。ブロン（白地）を買ひけり。されどもいまノワール（黒地）をしみじみ見入たり。想ふ。装飾品や、装身具とかやといふもの、もともと神物靈鬼に係る意味あり。たとへばマスカラなど中近東などにて眼の災ひを避くためにぞ行ひにけるあり。

「そう言えば」

最近放映されしテロのニュースを思ひ出しけり。凄惨なりき。無辜の人（少なくとも韋眞子には無辜と思ほゆる人）、その数十名なる生命の一刹那に失はれし暴虐、赦し難き残忍限りなき事なり。

この世は昏く復讐と憎悪怨恨に満ち満ちにてあり。ただただ空しく暴力ぞ猛威をふるふ。正論を言ふ心正しき者らは往々力弱く、眞實正義は儚し。善人皆暴力のまへに屈すなり。屈してしまわざるを得ざり。口惜しき事果てしなく、天涯を越へ叫び貫かむや。無念の情、切齒扼腕ならざらむや。韋眞子、かむが考ふるなり。

「復讐を肯定することに問題があるかもしれないけど、現実がこうである以上、少なくとも当事者が当事者に対して爲すというあたりまえな原則を守らなければ、恐ろしい血の報復の連鎖を生むわ。

加害者でない者が復讐され、被害者でない者が復讐を叫ぶ。理不尽が異常な残虐を産むのは火を見るよりも明らかだわ。加害していない者が復讐されれば、その憎悪は数万倍になる。人の憎悪の法則は怖ろしい。数千倍、数億倍になる。信じ難い、驚くべき凄惨と残酷とを生む。

それなのに、そういった暴虐は已む事を知らない。あゝ、何て恐ろしい世界。美しくもないし、眞実でもない。美とは百数十億光年もかけ離れているわ。日本だって他人事ではない」

さやうつらうつら思ひつつも、ふと気になりしことありて、同じ8丁目中央通りなる本屋に入りぬ。

「そう、これだわ」

セビリヤのイシドールス San Isidoro de Sevilla (羅: Isidorus Hispalensis、五六〇年頃・六三六年) に関する書籍なり。中世初期のセビリヤ大司教なりけり。

ヒスパニアの文明をぞ蛮族の野蛮の氾濫より守りたる。神によりて遣はされし人なり。これによりて六五三年に開かれし第8回トレド教会会議にて、最高の賛辞にて讃へらゆれ、六八八年に開かれし第一五回のトレド教会会議にて、こなる大賛辞ぞ正式に承認せらゆる。偉大なり。

さて夕刻。秋葉原に寄りてP Cを覧ずるなり。タッチパネルを試し、いま所有せるより良きレスポンスを挾ばむとす。

去る量販電機店に入りぬ。広く絢爛、横溢しあざやかなりけり。

P Cならぶコーナー見ゆ。未来を見むがごとき幾何學の明快。さまざまに触れ、

觀照し、鑑賞する。ふと氣附く。

「あ、柊斗だ」
しゅうちゅう

思はず小さき声ぞ洩る。見紛ふこともなき、高貴柊斗たる姿あり。知性に研ぎ澄まされたる高貴の横顔。冷凜とも非情とも言ひ得る、いずことはなく爬虫類さへ連想さしむ無表情。心に疼くものあるやを、韋眞子、自らに問ふ。否や。なし。一切。不可思議なり。なんぞ 奚や恋といふ。知らず。誰か何か知らむや。

「ふふ」

韋眞子は敢へて廻りて柊斗のまへに出でたり。

「久しぶりね」

男、咄嗟に冷淡装ふも眼は泳ぎにけり。やがて理性に拠りて定まりぬ。

「ああ。元気そうだね」

次ぐべき言の葉、繋ぐことなし。韋眞子、微笑み泛べぬ。

「そうね。だいたい元気ね、わたしは。で、あなたは、どう？　まあ、あなたも元気そうよね。ふふ」

「そうでもないさ。忙しくてね。研究室はストレスが溜まるんだ」

「でしょうね。一杯飲みにかかない？」

コンマ一秒、途惑ふも、

「いや。残念だけど、時間がないんだ。さっきも言ったとおり、忙しくてね。いまも研究室で使う私物のPCを探していたんだ。すぐに戻らないと」

「あら、残念ね。じゃ、またね」

柊斗がさやう言ふと知りて敢へて訊きし問ひなり。自らその心余裕を悦び楽しむ。力在りし者力試して楽しむがごとし。探せども氣に入りしタッチのPCなし。あたかも沙漠のごとし。

独りCafeにて飲めるエスプレッソ。テラス席にて。未だ九月といへども、この日、

ながつき

太陽沈みし後はやがて気温下がりにけり。すみやかなること幽門の開くがごとし。人出でず。歩道にはみ出す椅子に坐す。風立ちぬ。舞ふチラシを靴にて踏む。見遣れば璃厭の個人展を小さき画廊にて催す知らせなり。

拾ひて埃をきれいに払ひ、丁寧に折りたたみて卓上に載せ、砂糖壺の下に飛ばさ

れぬやう置きたり。

「これで義理は果たしたわね。後はどうなろうと知らないわ。誠意は尽くしたものだ。これ以上、わたしにはどうにもできないし。それにさ。

彼も望んでいないわ」

秋の日のバイオリンの長き嘆きのやう、切なき抒情、よきシャンパーニュのごとく美味し。心昂らせ、余情の旋律深きに陶醉さしむ。この恋成就する兆ししあらむとても、成就させるは余りに惜しきほど。

飯佐之あみの影響多し。彼の女と知り合^ひへし事、何とも言ひ難き昂揚をぞ覺ゆ。

楽しみ限りなし。スマートフォン鳴る。

「おはよう、韋眞子、元気？」

「いま8時よ、夜の。時刻はわかつてると思うけど」

「それが何だって言うの？ 眠くないもの、夜じゃないわ」

「何なの？ ブッシュマン Bosjesman」

阿蘭陀人よりブッシュマン（藪の民）とぞ呼ばれたるは、「カラハリ砂漠の叢林に住まう自由なる人」の意なり。彼の族をサンSan人と謂ひ、阿弗利加大陸南部のカラハリ砂漠にて狩猟採集する民族なり。

かつて彼ら「日が沈むは、我らが眠たくなるゆゑなり」とぞ言ふらし。あみはこれを以ていふなり。

「そうよ。あなたも知っているのね」

「知らない知識には事欠かないのよ」

『日が沈むのは自分が眠くなるからだ』ってね。あゝ、素敵ね。それが自然な人間の感情だし、自然と一体になって生きる人間の感情なのよ（ブッシュマンみたいに時間が合えばね。わたしはまだまだわ）。自然で、眞の意味で自由なのよ」

「かもね。」

わたしも自由になりたいわ。もっとね」

「え？ それ以上？」

「あなたにだけは言われたくない！」

「あははは。そうよね。ねえ、これからシャンパーニュでも飲まない？」

「わたしはあなたみたいな自由人じゃないわ。勤め人なのよ」

「じゃ、金曜日ね」

「しょうがないな」

「そう言えば狩りはどうした？」

「狩り？」

「璃厭のことよ」

「あゝ…。ゆつくり楽しむわ」

「そうね」

素気なく返答するなり。

ただ1秒の沈黙ありき。あみは韋眞子の恋心の薄れしを感じ、また韋眞子はあみ

がさやう感じゐるを感じ取りをり。さやうあるをあみもまた知らずゐるものかは。またまた韋眞子も観ずなり。

その夜、韋眞子、帰り独り歩めばつづ（粒々）なる星、天鷲絨のごとき天穹に眞砂のやう鏤められ、百億光年の彼方にあふれあり。あゝ、大地や海の広大なること限りなし。されども光は一秒にて全陸海を七周り半するといふ。

とても光さへ、到るに八分超ゆる彼方の太陽は、炎球とぞ見ゆるも、地水全ての百十倍なり。一切思料を絶すれども、夜の星さらに大きかるべきものあまた、また遙か遠し。光達するに十億年を要すも珍しからずなり。

遠き平安時代さへ千二百年。さなる二十万倍といふ歳月を想像し得るものかは。さやう想像さへかなはざる永き歳月を光さへ翔ぶべきといふ距りを想ひ画かゆるも

のかは。想像絶すはまさにこれにありなむ。

あゝ、天よ。吾がまこと恋せしは汝なり。天の御中なる北極星よ、北の辰りゅうなる七

星よ、天の川よ、あまたの星々よ、卿らなり。誰かそれを地上で理解せんや。さや

うなる者、稀有なり。もしゐるとせば、地上に堕ちたる、翼折れし者のみぞ。夢に

あらはれし魔族の貴公子、吾が脳裏に翻るその白き美麗。または十二枚のうるはし

き翼持つ熾天使や。

虚し、さやうなるロマンチズム。ナルシシスムにしかず。ただ時は逝くのみ。

「もうすぐ中秋ね」



中秋の名月の候。八月十五日と書きて「なかあき」と読むぞ読む俗あるは「中秋」に由来せしとかや言ふらし。古来、春夏秋冬は正月より三ヶ月を置くことにあり。七、八、九月は秋なり。季節には初、中、晩あり。八月は秋の眞中にて、十五日は月の眞中ゆゑ、これ「中秋」とぞ言ふ。唐土にては初、中、晩を、孟、仲、季といふ。旧曆なる四月（初夏）を孟夏と言ひ、また、中秋を仲秋と言ふはこれなり。すなはち仲秋といふは葉月を言ひ、十伍日のみを差すにあらず。

さてこのこと陰曆にしあれば、対応せる太陽曆日は、年によりて異なるなり。壬辰の年（平成廿四年）にありては長月（九月）の卅日なりき。癸巳年には長月十九日なりき。甲午は長月八日。乙未は廿七日。丙申十五。丁酉には神無月（十月）の四日なり。戊戌は長月廿四日。己亥十參。

その夜もまた、大日如来(摩訶毘盧遮那如来)も鎮座しますやと見紛ふ満月輪まんがちりん(に

近き円月)の頃なりけり。この年は秋分に近き日なれば、韋眞子、眞神にあり。

家の縁側にをり、夜空を仰ぐ。芒を差して飾れり。鈴虫の音玲凜なり。盞を傾け

ぬ。清酒きよみてすみたり。名月を映す。風涼やかにしてそこはかたく草葉を揺

らしむ。囁きのごとし。皓々たる月、銀の眩きと白の眩き力を合はせ照るなりけり。

清涼伶俐なること筆舌及ばず。心すがきこと、えも言はれじ。甚深精妙なりけり。

星遵へて燦めきの海を渉る月なる舟、神々しき哉。マハー・ヴァイローチャナ

महावैरोचनを満月輪に觀想せよといふ摩訶止觀の妙も此處に在りしや。

秋とぞ言へども紅葉未だ遠き。団扇に髪を扇ぐ。柔らかき黒髪揺れそよぎたり。

光の粒散るがごとくにて、すがし燦粒を流し眼にて眺め遣りしも、秋深まりぬとき

を待ち侘びるとは、山野の紅葉くれなゐ、黄葉きいろに染まるを愛せばこそかくあらめ。

まこと眞神の秋は錦繡といふに相応しき艶やなり。金襴緞子も、螺鈿施せし紫摩黄金の蒔絵も、色喪ふなり。さりとても、幽かに霞む枯淡のそこはかとなく匂ふ、

何處か懐かしき日の本の国の絢爛、韋眞子、魂魅せられ、これを愛す。

璃厭のことは何ごともなし。画廊に通ふもあの日限りなり。遲疑逡巡に非ず。獅子が肥へたる鹿を見て、貪る時機を伸ばしつつ、楽しむに似たるや。否。または贅に飽ひたる王皇わうわうが畸形なる精神の、歪みたる悦樂せしや。否。捉へ難くて何とは言へぬもさらさらと清みて明晰なり。秋日の天晴れの陽射しのごとくに。

某日、某カフェにて曰く、

「なぜなら、わたしの人生が**アハ**だからよ。当然そうなのよ。これは美だわ。

むろん、わかるわよね、あみ」

「わかんと言えば納得しなくせに」

「そうよ。まるで古代の女神のようにね。メソポタミアのウルか、ギリシアのアテナか、異教の都市の神殿に荘厳される女神のようにね。

ギルガメッシュの王都の城壁の上に立って、自分を袖にした王を呪詛する女神イシュタルのように、よ」

「うふん。わたし、いつの日かギュスターヴ・モローGustave Moreauみたいな雰囲気のあるイシュタルを創ってみたい」

「モローにそんな作品あった？」

「たぶん、ないわ。イメージよ。そうなの。何だか、あたりまえのように、それが

住みついちゃっているのよね。既に過去に見たことがあるみたいに。わたしね、少女時代にユイスマンス読んで以来、イメージ上のギュスターヴ・モローってのが焼き付きちゃって、頭から離れないのよねー。

ねえ、楓が染まる頃に、あなたの故郷に行きたわ」

「むろんよ。『随神かんながらに神の幸さきはふ邦くに。神なる俚に神さびせす眞秀まほら』よ。いつ来ても素晴らしいわ」

「言葉の意味がわかんないよ。何語？ 何て言ったの？」

「日本語よ。『神様が神様として幸運に栄える国。神様のままに振舞う素晴らしい場所』って意味よ」

「神聖な場所らしいわね」

「そうよ。あたりまえじゃん、わたしの生誕の聖地だもの」

「じゃ、美神の聖地巡礼で。睿智の杖を持って往かなきゃならないかしら？」

「わかってるわね。美こそが睿智よ。睿智が眞実を創造するからね。だから Art が生きる意味なのよ。太陽のように肯定的な人生だわ」

冬。眞白き里に藁葺の納屋、墨痕のごとし。鬱たる杜岡も白く、葉陰が筆の穂先の跡にも見ゆる。煙突の煙か細く消へ、烏侘し。韋眞子、師走、正月一步も家より出でず、尼のごとく清楚に暮らせり。さりとて一の小説を書き上げにけり。美麗なる高貴の血統ちすじにしある逝いにしへの族やからなる、悪魔の貴公子の跳梁跋扈せし *décadence*

小説なりき。酔ひもせず見し夢。

閑

『美しき哉、アート。文藝も又、美ぞ眞實也。』

